



# 鶏鳴

〒221-0864

横浜市神奈川区菅田町2851

(電話 045-473-7191)

パウロの言葉

『わたしは福音を恥としない』

聖書(ローマ書 1章 16節)

牧師 河合裕志

パウロにとって福音というのは「十字架につけられたキリスト」だった。そのことによって人類に罪の赦しをもたらされるというものだった。

しかしそれを恥かしいと思う人が少なくなかった。①多くのユダヤ人がそう見ていた。「木にかけられた死体は、神に呪われたもの」と記されているところに従ってそう見なさざるを得なかった(申命記 2 章 23 節)。十字架にはりつけになったキリストは恥べきものだった。

②ギリシャ人にもそう思われた。彼らは高尚な哲学の探求を好んだ。十字架についての教えは愚かしいものとうつつた(コリント前書 1 章 23 節)。ギリシャ人は外国人を代表。ユダヤ人以外の多くの人々の目にも十字架はそんな風にみなされた。

そうした中であってパウロは「わたしは福音を恥としない」、むしろ十字架につけられたキリストを誇りとすると断固主張した。なぜそう言うのか。その点を次に続けて述べている。「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」。

普通、神の力と言うと神による天地創造のわざが覚えられる。創世記などによれば

神によって、その発する言葉によって次々と天地が創造されて行くのだからその力はすごい。まさに全能。

ところでパウロはここにも神の力は発揮されているよ、と言う。それが福音によって全人類に救いをもたらすというもの。創造のわざに対しては救済のわざということに。確かにこのわざも大きなものと言わねば。ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、つまり全人類、分け隔てなく救ってしまうということなのだから。

ただそう言ってもそこに「信じる者」という限定は残る。この点は無差別にという訳には行かない。福音=キリストは私の罪が赦されるために十字架について犠牲となって罪の赦しをもたらしてくれたというグッド・ニュース。これを信じるかどうか。有難く受け入れるかどうか。この点に関しては個人の判断にゆだねられる。

ただ神とキリストの願い、そしてパウロの願いは信じる者になってほしいということ。信じてくれなければキリストの死は無駄になってしまう。神の救済のわざは宙に浮いたままになってしまう。神は全能だけれど個人の心の扉をこじ開けることは難しい。

**集会案内**

日曜礼拝：午前10時15分、日曜夕拝：午後6時

子どもの教会：日曜日午前9時

求道者会：日曜日午前9時40分

中高青年会：日曜日礼拝後

お話し会、卓球：水曜日午後1時～7時

お祈り会：水曜日午前6時、午前10時、午後7時

お祈り会：水曜日午前6時、午前10時、午後7時